

海外派遣報告書 生物科学専攻 D2 大出晃士

派遣先 台湾国立清華大学 National Tsing Hua University

派遣期間 2009/05/12 - 2009/05/16

参加学会 Life Science Student Activity Fair 2009

2009年5月12日から16日まで、台湾国立清華大学で行われたLife Science Student Activity Fair 2009に参加した。このFairは清華大学の生命科学院と大阪大学の生物科学専攻の国際交流の一環として行われた。Fairは清華大学の大学院生の成果発表会の中に一部組み込まれており、私たちも成果発表に参加した。Fairは主に清華大学、大阪大学それぞれ8人による口頭発表と、大阪大学および清華大学の大学院生100名余のポスターセッションで行われた。口頭発表は20分強の持ち時間に5分前後の質疑応答がもたれた。英語での発表であること、発表時間に余裕があることから、背景から結果考察にいたるまで、まとまった一遍の講演を準備することが求められた。発表準備を含め、英語発表の技法およびセンスを習得する非常に良い機会となった。口頭発表では学生を座長として進められた。総じて清華大学の学生のほうが英語に堪能であり、私たちは多くの刺激と英語習得へのモチベーションを得ることが出来た。研究発表の内容、問題設定の適切さ、スライドの作り込み等は阪大側の努力がよくあらわれており、清華大学の院生方に参考としてもらえたのではないかと思う。質疑応答については、双方について学生からの質問や議論への発展が少なく、今後の課題であろう。良い意味でInformalであるという風潮はあったので、質問を誘導する一工夫があればさらに活発な議論が期待できる。座長もまた、重要な役割を果たしており、発表者の専門分野、学位の取得歴、発表内容に至るまで事前に取材しそのセッションに臨んでいた。私も一つのセッションの座長を任せられた。事前の取材は時間的に難しかったが、そのセッションを活発に、テンポよく進行するという意味で責任を果たすことが出来たと思う。ポスターセッションは、清華大学の成果発表会と合同で行われた。私もいくつかのポスターを見てまわりディスカッションをした。内部の発表会とは思えないほどに、どの演題もよく作り込まれており、また研究を開始して1年程度の修士の方々も非常にクリアな結果を出しており、普段のハードワークが現れており、阪大も大いに見習うべき点が多くあった。同時に、私たちのポスター発表を含めて発表に対して多くの質問、議論がなされ、清華大学院生の積極性に驚かされた。分野外であっても、解らないポイント、疑問を感じる点については納得するまで議論するという姿勢に感銘を受けた。全体的に、修士を中心とする院生の熱気が全体の雰囲気盛り上げているように感じた。成果を発表し、相互に評価する機会を自分たちで盛り上げる点は、ぜひ阪大にも持ち込むべき文化と思われる。一方、自らのプロジェクトの全体像、独自の観点と疑問の持ち方等は発表を聞く限り、あまり感じられず、残念であった。「自分はこう考えて実験している」という主張があれば、データーの議論にとどまらず、研究の方向性にも踏み込んだ意見交換が出来ると思う。私個人の発表としては、口頭発表は楽しんで行い、また頂いた感想を聞く限り聞きやすい発表を行うことができたようで、その意味ではよかったと感じている。しかしながら、いくつか準備不足の点があり、もう少し上の発表内容を目指すことも出来たと感じており、課題がいくつか残った。具体的には、反応モデルを用いた説明(概念的な説明パート)についてはさらに“上手い”説明の仕方があったかもしれない。また、会場や舞台が広がったので、もうすこし会場を広く使う(動きや視線を使って)発表ができたのではないかと思う。ポスター発表は、日本の学会よりも熱心に聞いて頂いたこともあり、データーの細部まで説明をさせて頂いた。2時間あまりだったが、それでも話しているうちにイントロダクションや、メッセージの説明がスマートになっていったので、経験は重要であると再確認できた。

しかしながら、今回のFairで最も印象深くまた深い感動を覚えたのは、発表の合間や発表後の学生交流であるということ強調しないわけにはいかない。空港での出迎えから、構内の案内、毎晩のもてなし、そして観光と清華大学院生側のホスピタリティには深く感謝している。企画されたどのイベントも、決して“観光客相手”の物ではなく、1対1の友人としての物であった。私を含め、おそらく全ての阪大側参加者が、彼らに何らかの形で恩返しをしたい、と思ったはずであり、今後の私たちの考え方に多くの影響を与えるであろう。それがこのイベントが目的としていた最大の成果であろう。この意味で本Fairが成功であったことは間違いない。今後もこの交流会が継続し、多くの後輩が同様の感動を共有することを強く望む。

以上